

助産師が中心となって出産をサポートする徳島大学病院周産母子センター（徳島市）の院内助産システム「ひなた」で、

100例目の赤ちゃんが誕生した。妊産婦からは「アットホームな雰囲気の中で出産できる」と評価を得ている。全国の国公立大で初の取り組みは、出産を巡る多様なニーズの受け皿として定着している。

徳大病院 10年に開設

院内助産 100例目



徳島大学病院の院内助産システムで産まれた100例目の赤ちゃん＝徳島市の徳島大学病院

「雰囲気良い」妊産婦に好評

ひなたは2010年10月に開設した。妊娠の経過に異常が見られないなど、出産リスクの少ない妊婦が利用でき、年間の出産数は10例前後で、100例目の赤ちゃんは7月26日に産まれた。

分娩台は使わず、マツトを敷いた個室で助産師の介助を受けながら出産する。リラックアロマもたける。産婦は横向きになったり、座ったり、家族にもたれかかったりと、一番楽な姿勢で出産でき、その動きに助産師が対応する。

病院が1年間の研修を課した上で独自に認定する「エキスパート助産師」の資格を持つスタッフが担当。妊娠中の外来健診や保健指導から、出産、産後1カ月の健診まで継続的に関わる。緊急時などに医師とすぐ連携できるのが強みだ。

100例目の赤ちゃんを出産した県内の女性(31)は「初産で不安だった。でも、助産師がよく話を聞いてくれて信頼できる関係になり、満足のいく出産ができた」と言う。

国は医師不足などに対応するため、医療機関で医師と助産師が連携する「院内助産」の導入を推進。徳島県は四国で唯一、助産師が開業する出産施設がない。

く、徳島大学病院が開設した。

担当者は「自然な出産を支援したいという助産師の強い思いがあって続过来了。200例を目指し、取り組んでいきたい」と話した。

(竹内仁志)